

道 頓 堀

第七卷 十一月號

昭和七年十一月廿五日第三種郵便物認可
昭和七年十一月一日發行 一月一回發行



鰻

幣店 独

野

菜

川

御特

御

魚

并

当

料

理



電話南 四八一〇
九五四二
四八四四

風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節日本御料理

芝居情緒と食道楽

喜久屋食堂

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を!

道頓堀戎がし北詰

支店

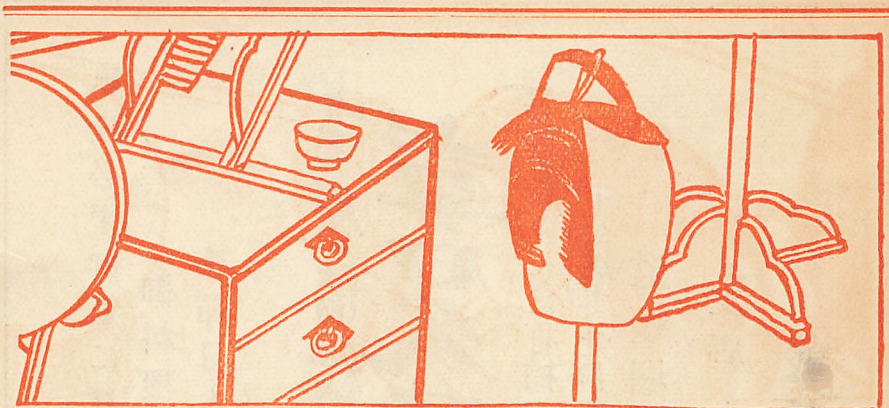
大阪支店 北新地裏町

京都支店 木屋町ドングリ橋

戎橋 喜久屋北店

(心齋橋筋二丁目)





道頓堀 昭和七年十一月號 第七十四輯

口 繪

中座 東西合同大歌舞伎 敵討龜山噺 赤堀水右衛門・延若 香樹屋の場 赤堀水右衛門
 延若・源藏の妻お時 芝鶴・石井源藏 魁車 魁車 ちとせ屋の場 遊女よし實はお時 芝鶴・石
 井源藏 魁車 重井筒・紺屋徳兵衛 福助・おふさ 魁車 文祿夜話 木村常陸之介 壽三
 郎・石川五右衛門 延若・遊女お瀧 多賀之丞 玉藻前囃杖 鶯塚金藤次 延若・萩の方
 魁車・桂姫 芝鶴 額の小さん 弟子金之助 長三郎・金屋金五郎 壽三郎・額の小さん
 福助 入出演 大尉の娘 豫備大尉森田慎藏 井上 娘露子 水谷八重子 追善二筋道員に藝
 術座加入出演 大尉の娘 豫備大尉森田慎藏 井上 娘露子 水谷八重子 追善二筋道員に藝
 さよ 水谷八重子 有名残二筋道と追善二筋道 喜代次 喜多村 桂子の旦那 藤村 桂子
 花柳 花柳おすが 河合 阿久津謙三 梅島 長閑なる反目 丸地 小堀 留奈子 水谷八重子
 野見 花柳の人? 鬼? 舞臺面 新釋琵琶歌 序幕草刈の舞臺面 里野 水谷八重子 柳田中
 尉 小堀 武田貞次 花柳 里野 水谷八重子 兄三藏 井上 西村禮太 梅島 武田貞次 花柳
 松竹家庭劇 浪花座 エーストッパ 運轉手田中淳三 十吾 娘ちえ子 京子 妻豊子 石河
 薫 助手岡本 天外 おお姫様とお婿様 蔭青 小織 宜華 浪花千榮子 張學相 高田王蘭
 石河薫 母親の探索 舞臺面 新三郎の妻光子 東愛子 母おふみ 十吾 秋晴れ 友人土井
 天外 西島文吉 十吾 女房おみね 春野音羽 文樂座 人形浄瑠璃 繪本太閤記 舞臺面

口表 紙・敵討龜山噺、庵室の場

口扉 (スケッチ) 實川延若の鶯塚金藤次 大塚克三

續重井筒考 高安吸江 (二)

水右衛門役者 倉田啓明 (二〇)

俗説「小さん金五郎」 西尾福三郎 (二〇)

敵討龜山噺 中座東西合同大歌舞伎 春 廻 家 (一一)

有名残二筋道 歌舞伎座十一月興行 (一一)

追善二筋道 同 (一一)

また見居芝



◆「人？鬼？」について……………中村吉藏（三三）

◆「人？鬼？」の演出に就て……………水谷竹紫（三四）

◆俳句「似顔繪羽子板」……………小山紅露（二四）

松竹家庭劇……………浪花座（一九）

東西合同大歌舞伎……………中座（二六）

新派總動員に藝術座加入出演……………歌舞伎座（三六）

「重井筒」上演研究會の記……………日比生（五）

故伊井容峰を偲ぶ……………（二六）

河合武雄 梅島昇
花柳章太郎 英太郎

□挿繪カッタ……………松本

□編輯後記……………住田冬和（三八）

清々しき
頭髮美！
この色！
この匂！

香水入純植物性

オドリナポルマド



美しき
肌の……
魅力は！

バニシング

オドリナクルメル

原香料香水オドリナ
本舗東京安藤井筒堂

“敵討龜山”

濱松八幡社前の場
赤堀水右衛門
實川延若



“香樹院の場”

若延川實・門衛右水堀赤
車魁村中・藏源井石
鶴芝村中・時お妻の藏源

“とせ屋の場”

車魁村中・藏源井石
鶴芝村中・時おは實しよ小女遊

座中の月一十



車魁村中 さふお・助福村中 衛兵徳屋紺 “筒井重”



郎三壽東阪・介之陸常村木
若延川實・門衛右五川石

話夜祿文”

承之賀多上尾 川瀧女遊・若延川實 門衛右五川石 “話夜祿文”



ベスト判	十七圓
フィルム	五十錢
ヨリ	

趣味の小型寫眞器

パレットカメラと

整色性

さくらフィルム



到る處寫眞材料店にあり

寫眞器及小型映畫器

小西大六阪支店

大阪區長堀橋南詰



最高の水準！
最大の夕刊！

毎日 6ペエチ
1ヶ月 50セン！

申込は 北尾新聞舗

大阪第一の



ユカイな

面白い

見逃せぬ

どの家庭でも

引張り凧の

明るい夕刊

玉藻前
磯袂



菅塚金藤次
實川延若

座 中

“玉藻前
曦袂”

萩の方
中村魁車

桂姫
中村芝鶴



中
座

純白固煉



新發賣

御園チタニウム白粉

驚異的

新化粧美!

正價 金五十錢

■ 艶麗な濃化粧に……

目もさめる様な白さ。明るい華やかな澄み切つたお化粧上り。

■ 清楚な淡化粧に……

うすく溶いても白さが濃く、ノビが平らでムラがなく、さつぱりした美しさ。

■ お襟の魅力に……

くつきり冴えた美しさ。お召物を少しも汚しませんから快くつかへます。

□ 断然優良な新原料が持つ此白さこそ

新日本女性美です!

青空晴れて
心も朗らか

明るい秋のメイク・アツプは……

クラブ白粉





“ 小 さん 金 五 郎 ”

弟 子 金 之 助
 金 屋 金 五 郎
 藝 妓 小 さ ん

林 長 三 郎
 阪 東 壽 三 郎
 中 村 福 助

中
 座



“ 旅 音 初 行 道 ”

丞之賀多上尾 前御靜
郎五津三東坂 信忠狐

座 中



“ 娘 の 尉 大 ”

藏慎田森 尉大備豫

夫正上井

子重八谷水 子露 娘

“ 追 善 二 筋 道 ”

お
さ
よ

水
谷
八
重
子

歌
舞
伎
座



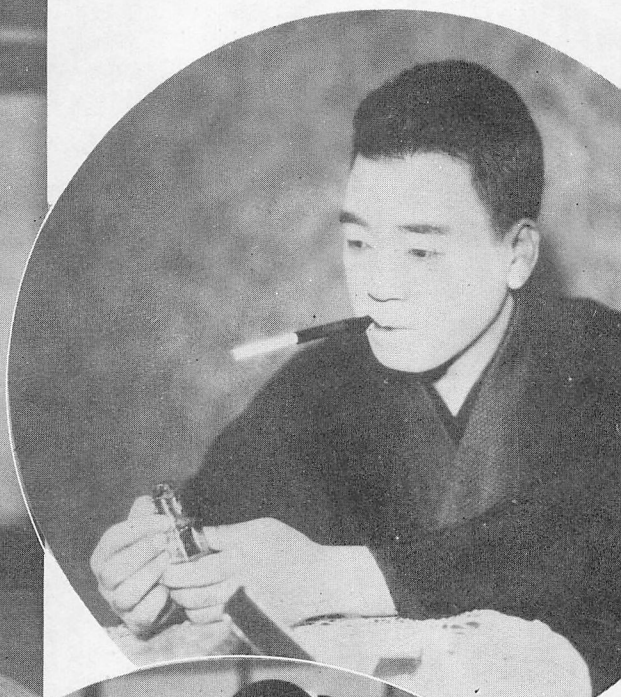
お名残二筋道
追善二筋道
の喜代次

喜多村緑郎



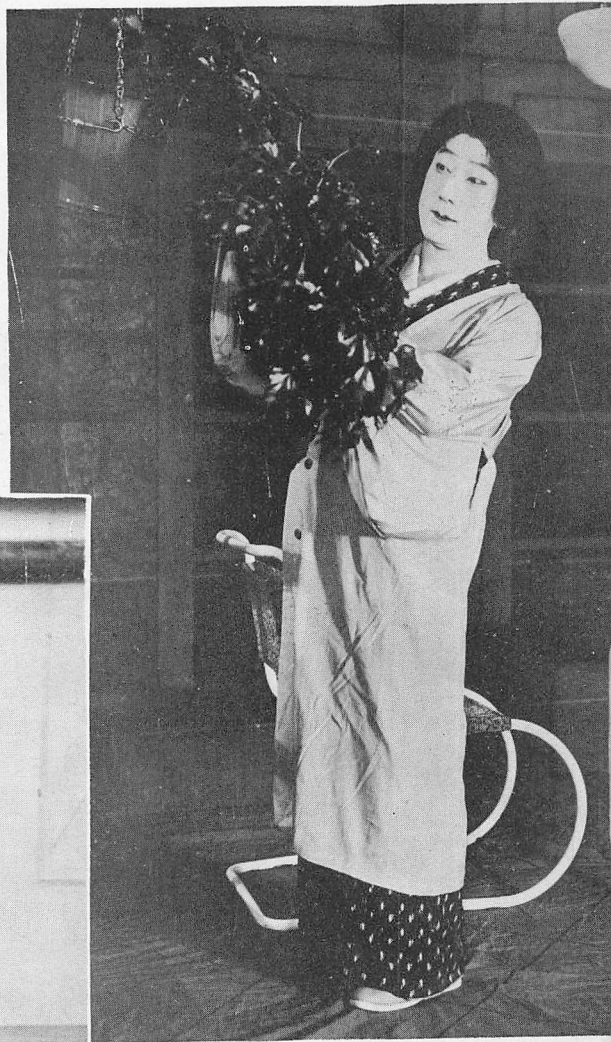
歌
舞
伎
座

桂子の旦那
鈴村
藤村秀夫



お名残二筋道
追善二筋道の桂子

花柳章太郎



〃 お名残り二筋道 〃

おすが 河合武雄
阿久津 梅島 昇

歌舞伎座

“長閑なる反目”

丸地・小堀 誠



面臺舞の “？ 鬼？ 人”

“目反るな閑長”

子重八谷水 子奈留
郎太章柳花 見野





面臺舞の「刈草」幕序

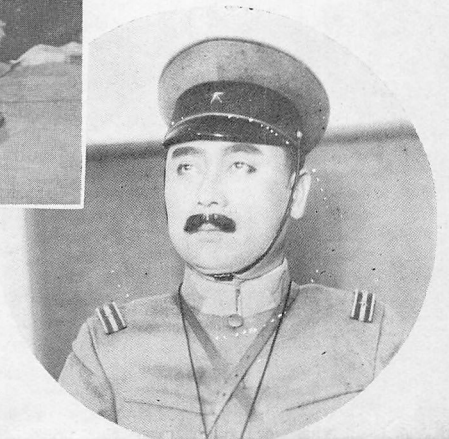
新釋
「琵琶歌」

里野

水谷八重子



誠 堀小 尉中田柳





新聞

廣告は電通

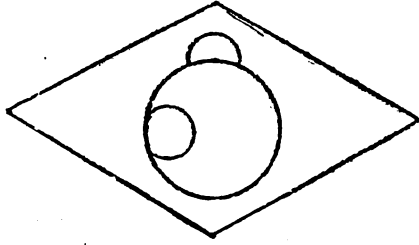
支主 本社 東京 日本電報通信社
 局ナ 局
 南北益下金 古
 京平山關澤 々
 新天京長京 南
 青津城崎部 部
 巴青奉福碑札
 星島天岡戸横
 倫濱大朋岡 齊
 敦口運平山 森
 桑上哈理廣仙
 港海貿島島臺
 羅廣臺大松長
 府東北分山野

大阪市北區中之島三丁目
 新聞通信社
 廣告代理店
 大阪電報通信社
 電話 九九五五
 二一六五
 本局 六一九九
 〇三九三
 三二六六
 三九〇〇
 二〇〇五
 〇〇四四
 二〇〇五
 〇〇三三
 五番五部
 六部
 〇



大阪歌舞伎座

二階休憩室賣店



さるや

東京市日本橋區小網町

電話浪花四七〇六番

大阪歌舞伎座

二階休憩室賣店



いせ勘

東京市淺草區仲見世

電話淺草二〇七四番

伎	歌
座	舞



郎太章柳花 次貞田武
子重八谷水 野 里



夫正上井 藏三兄



昇 太禮村西
島梅
次貞田武
郎太章柳花

『ゴーストツプ』

運轉手 田中淳三
 娘 ちえ子
 田中の妻 豊子
 助手 岡本
 天 石 京 十
 外 河 子 吾



『お姫様とお婿様』

蔣青(元老)
 小織桂一郎
 宣華(女侍従)
 浪花千栄子



張學相
 高田 亘
 玉蘭(馬賊の女王)
 石河 薫

アングロス井ス

ミルクチヨコレート

コーヒキヤラメル

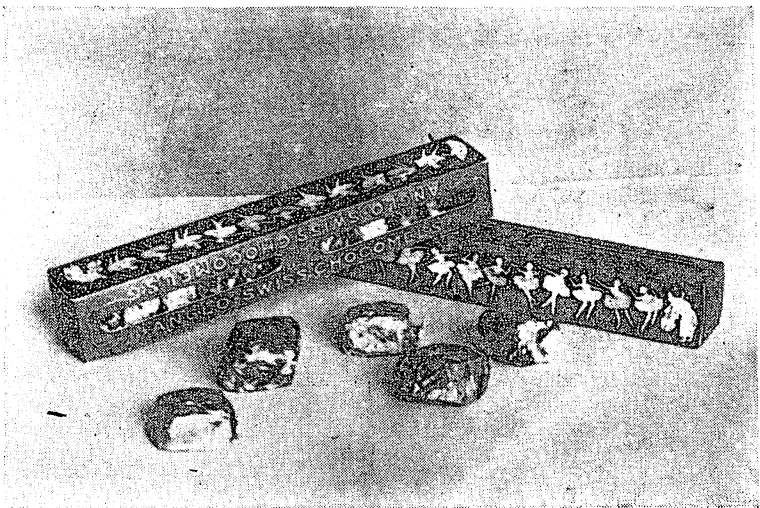
チヨコレート
キヤラメル

チヨコレート
メル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元 株式會社 横山商店

電話東(94) 一六六一番
二〇四九番
四六四九番

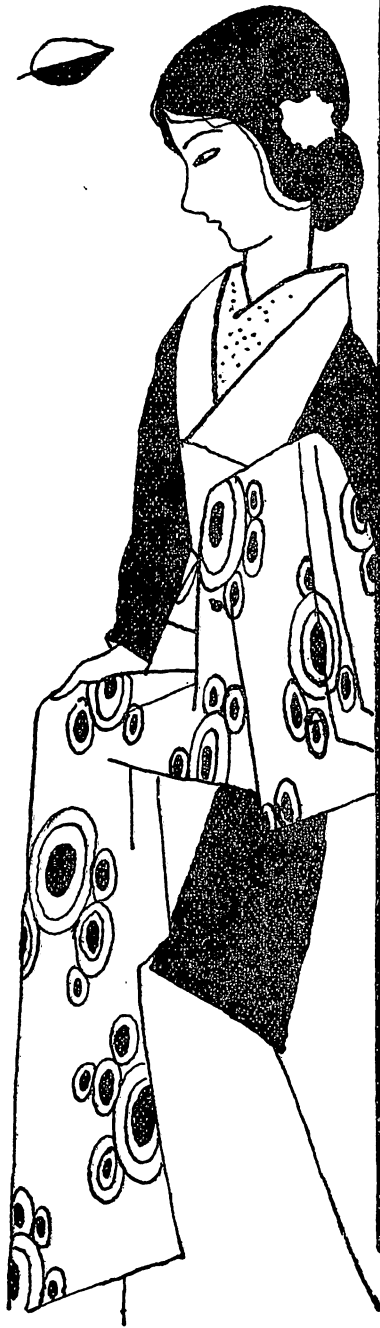




裂 小・具道小
貸 衣 裳

素人演藝會
宴會の催物
春秋温習會
婚禮の衣裳

松 竹 衣 裳 部



(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい)
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます)

本 店
東京支店

大阪市浪速區南坂町松竹ビル内
電話 戎 五 六 三 四 番
東京市淺草區並木町十五
電話 淺草 五 五 九 九 番

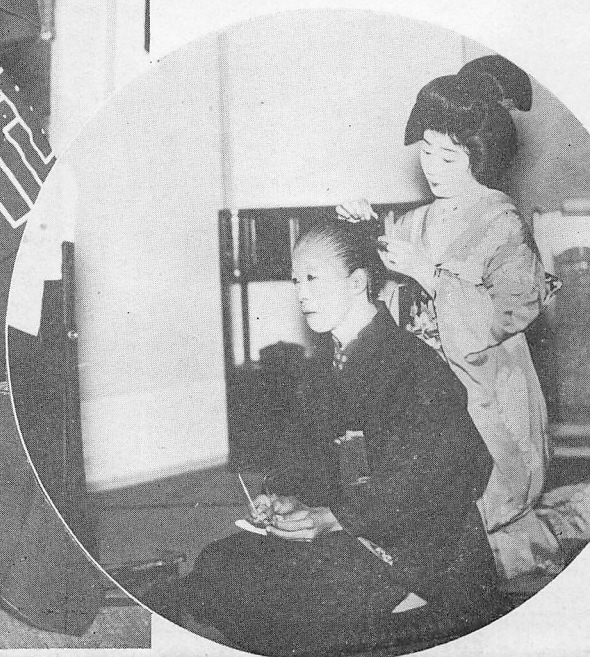


秋晴れ



同女士井井忠助 澁谷天外
 夜店の植木商人 十 吾
 西島文吉
 文吉の女房 おみね 春野音羽

新三郎妻 光子
 東 愛子
 新三郎母 おふみ
 十 吾



繪本太閤記

十一月興行



性病豫防治療新劑

感^カ性^{セイ}



乳劑	膏錠	坐藥	クリーム
クドク	膏 錠	坐 藥	クリーム
	膏 錠	坐 藥	クリーム
	膏 錠	坐 藥	クリーム

各劑
¥ 1,20

發賣元

高橋盛大 堂

東區博勞町 振替大阪三三〇〇番

製造元

大阪細菌研究所

北區萬歲町 振替大阪一八九三番

大阪市東成區鶴橋南之町一丁目



桃谷印刷株式會社

電話天王寺 (77) 二六七〇番
二六七一番

雜誌·研究劇撰·刊月

十一月號

通類編

第七年

第七十四輯



延喜
金草次

支

續重井筒考

高安吸江

フツウストの前後を兩夜に、ニーベルンゲンを三晩に演ずる例に倣つて、忠臣藏や菅原のやうなものを二三日に分けてやれば良からうと、嘗て私は本誌に書いたことがあります。

そのためと云ふわけでもありませんが、其後忠臣藏が二回に分演（妙な語ですが）されましたので面白く感じてゐました處、今度は世話もの、重井筒が紺屋と六軒町とを一月経つて出されるやうになりました。

此六軒町重井筒屋の場は御承知の通り、近松の心中重井筒の中の巻で近頃はあまり出ません。何でも四代目（？）延三がやつたとか聞きました私にはシカとした記憶がありません。

せん。いつか成駒屋に此ことを尋ねた處、徳兵衛が炬燵でフテ癡てし煩悶する中に近所の淨瑠璃がきこえる、それが堀川で、その「コレ徳兵衛さん」で癡て居る徳兵衛が「ハッ」と返事して飛び起きたりすると見物がドツと笑ふた話などが主で、更に詳しい點になると少々曖昧になり、いつの間にかやお初徳兵衛の方と混線したりしてしまひました。つまりそれだけ此場が珍らしいものだといふ事がわかりましたやう。

重井筒といふ名が知られてゐる割に此れ迄あまり上演されなかつたといふ理由から、先きは我々同人が此場に就いて多少研究——といふ程でもありませんが、少々ヒネクツて見

たことがあります。

それは今から三四年前のことでした。若手俳優諸君と劇愛好者とが集つて出来た次の時代の會でその俳優側會員の研究用として、始めは放送にでも使ふつもりで此一場を出來るだけ原作そのまゝにしぐんで見たのです。恰度昭和四年の四月に木谷、大西、高原その他數名の委員が數回會議の上大體決定し、絃の方との打合せまでも出来たのでしたが、機運が熟さず未定稿の儘になつてしまひました。今回は九月にやつた原作本位の紺屋に次いでやはり福、魁中心の中の巻が上演されることになりましたが、無論我々が試みたやうに原作そのまゝと云ふわけには参りません。といふのは朗讀とちがひ實演になると中々時間のかゝるものであるのに、一幕一時間以内といふ時代の趨勢を決して無視することが出来ないからで、こゝに脚色者食満南北君の所謂涙を振つて馬糞を斬るといふ、已むを得ないカットの必要が起つて來たのです。

原作によりますと、身の行末を悲觀して死

を決したお房が、障子の月を明りにして剃刀を合せるのを見つけた内儀は、房に肩をもませながらそれとなく意見しますが、恐らくこれが後年に出来た一中の小春髪梳きの粉本になつたのだらふと思はれます。で我々はこゝを一つ繁太夫でも使つて大いに嬉しがりたかつたのですが、どうも此時間が崇つて残念ながら大半カットされました。

尤も時間ですが、後の炬燵の處で徳兵衛に對する兄の仕内は現はでなくてもやはり一種の意見であり、そして此場では此方が主になつて居る關係上どうしても肩もみの割愛は已むを得ません。

炬燵と云へば近松氏はよほど冷え性(一)と見えてよく此れを使ひたがります。紺屋の紙治の内とよく似てゐるのをはじめ數えるに限がありませんが、殊に淀鯉などでは重井筒の宣傳さへやつてゐるではありませんか。

その炬燵で房が火責にあひます。そして始めの火廻しでは、火屋へやれの、イヤ火箸で焼け、やれ灰寄せのと皆からせめ立てられる

房自身も丙午など、云ひます。元來此丙午の迷信は古くから唱へられて居るらしく、近松も既に貞享三年の佐々木先障で重忠に其れを轉ずる法を説かせて居ますが、一般の注意をひいたのは、紀海音も「渡りかねたる丙午、富士の煙と諸共に消ゆる命ぞ果敢なけれ」と書いてゐる八百屋お七以來らしく、それに下の巻の道行の中に祭文のお七の文句を使つた點などから察して、何かお七と因縁があり、うにも見え、その火刑の天和三年から重井簡初演の推定年代寶永四年が恰度廿四年目に相當することなども考慮に入るべきだとは思ひますが、まだ此れに關する好い材料は見つかりません。

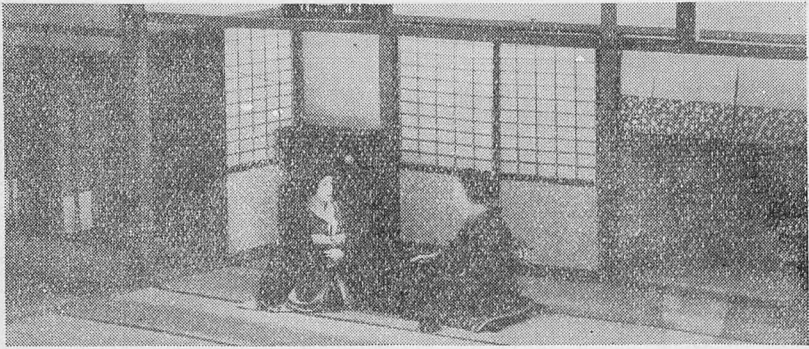
それから面白いのは二人が屋根傳ひに遁れ行く段切で、此れは他にあまり類が少く、偶偶やつた小かん平兵衛なんかも唯人の噂だけで動作は陰になつて居ますが、此の方は實際に、

道は三途の瓦葺 霜の劍の山研えて、此處に地獄の鬼瓦、弓手も馬手も恐ろしく

と屋上の道行で、演出如何になつてはかなりの効果を期待して良いと思ひます。

終りに演出について一言させて下さい。紺屋に於ける福魁兩氏の勞苦は多とすべきものでありました。他に多少粉本がないとは云へぬお辰の方はまだしもとして、人形振を捨てた羽織落の苦心は恐らく他からの想像以上だつたらうと察します。こうした新しい企てはそう一朝一夕に完璧となるわけのものでありません。回を重ねるに従ひ、研究に研究を積むことによつて始めて固定した型式が出来上るのは知れきつて居ます。

今度の六軒町にしても無論同様に熱烈な研究的態度でかゝらねばなりません。それにしても陰氣で沈み勝な中に強い決心をもつて男を引かつて行く房が魁車氏の畑である事を誰しも疑ひますまいが、温雅で無口なあの高砂家が布團を踏んでの煩悶はともかく、生姜茶に生姜炬燵、さては炬燵に水を入れるなどの言葉をとつた氣持で取扱ふか單に洒落や粹言葉でないのはもとよりの事、(九頁へつゞく)



重井筒 研究會 日比生

「重井筒」上演

研究會の記

日比生

十一月の中座では、九月の此座で、福助、魁車等の上演で評判のよかつた近松物の「心中重井筒」の紺屋の場に續いて、今度はいよく本題に入つて、重井筒の場を上演することになつた。もともと此狂言の上演については、三四年以前木谷蓬吟高安吸江、高原榮雨、大西利夫、富田泰彦の諸氏が、何かの會合の際に、大阪に基調を置いた、どつしりした狂言で、何か珍らしいものを詮衡して機會があらば、その研究上演を遣つて見やうではないかと云ふやうな相談が持ち上つて、直ちに木谷氏の首唱で其選に上つたのが此「重井筒」であつた。さうして特に紺屋の場よりも、明治年間に入つても殆んど上演されたことのない、重井筒

の場こそ尤も適當であらうといふことになつて、早速原作の研究及び其脚色化について以上の諸氏は再三會合を續けて、漸やく具體化すると共に、最後の打合せ會を開くに就て、從來借用してゐた松竹座の一室から、白井社長邸へ轉じることになつた。といふのは白井氏にも此脚本を聞いて置いて貰つて上演の際には何かの便宜を謀つて貰ふ方が都合がよからうといふのであつた。其夜の會合は可なり脂の乗つたものであつた。白井氏にも可なり意見があつた。而し研究上演の機會は遂に

記の會究研演上『筒井重』

來なくて今年に及んだのである。

今秋中座の改築初興行に、何か珍らしいものは無からうかと、白井會長の

頭惱は電光のやうに閃いて、彼れか是れかと狂言の物色中、ふと記憶に蘇生

つて來たのがこの「重井筒」。而し從來の演出では何うも近松作の精神に遠い

し、勿論現代の看客心裡に合致しない

それといふので、早速以上の諸氏を招待して改めて、此上演についての意見を聞くことになつた。

脚色者の食滿南北翁の手許には既に紺屋の場が脱稿されてあつて其脚本を

主題にして、以上の諸氏の外併優則から福助、魁車、松蔭君が立會つて慎重

な協議が進められ、遂に上演を見るに至つた。さうして從來一定不變の型であつた四つ辻の場の人形振りを斷然人間

の儘で心持の變化を見せやうといふ大膽な改變が行はれたりしたのであつ

た。其席上白井會長は十一月興行に此狂言の續演として重井筒の場を出すこ

とを豫約的に列席の諸氏に述べられてゐた。

歌舞伎座の千秋樂を終つた其翌二十

八日の夜、笠屋町の白井邸へは再び以前のやうな顔觸れが集まつた。兄を演

る筈の壽三郎は撮影の都合で缺席したが、女房のお梶を演る東京の尾上多賀

之亟も恰ど來合はせて座に在つた。

秋の夜はまだ宵ながら、しつとりと時を刻んで、南北翁の本讀みが綿々たる情趣を湛えて、惱ましい色街情緒を

織り出す、六軒町の小夜格子は、いまかうして座つてゐる白井邸の笠屋町と

は、つい裏腹の玉屋町の邊りと聞く、近松描くところの嶋の内情景は髣髴と

して眼の底に浮んで來た。座中の面々は美しい名文に聞き惚れてちつと暫らく冥想を恣にした。やがて本讀みは

終つて協議に移ることになつた。その前に南北翁から、釋明があつた。

「原作尊重で行きたいのは山々ですが何分にも晝夜二部制の興行で、全部を

生かそうとすると、とても時間が立て込みますので、餘儀なく割愛をしたと

ころはよろしく御諒承を願ひます」

房と徳兵衛の幻想に酔ふてゐた座中の人々は一度に現實へ呼び戻された。

さうして、大體に於て手際よくまとまつてゐる脚色に同意はしたが、内儀

が房への意見の件が全部午勞抜きになつてゐることに、會員中から抗議

が申込まれた。この意見の件は人情の委曲を盡された名文で、繁太夫節を

始め其他の俗曲にも轉用されてある、お房がいろいろと思ひつめた上、死の

覺悟を定め、月明りの障子の下で、剃刀を出して砥石に合はして居る時、偶然内儀に見付けられ、内儀は剃刀を取

上げて、房に肩を揉ませながら曲

輪や此處の奉公は樂しみ無うは勤まらずと云つたやうな同情に満ちた

長い／＼意見がそれであるが、これを全部抜かれては、芝居全體の情味に缺けることになりはしないかといふ心配

記の會究研演上『筒井重』

であるが、さりとて原作の如く叮嚀に演つてゐるは、後に又重井筒の主人即ち兄が徳兵衛に對する意見と重複もし徒らに芝居をダラシて了ふ結果になるかも知れない。その間の脚色に就ては南北翁も

「遺が名文句で、情味も充分に行届いて書かれてあるので、何處を削除して何處を生かすといふやうなことは到底出来ない、生かせば悉く用はねばならず、さうしては時間が足らず、困つたので、寧ろ全部を抜いた方が無難かと思つた」
と其苦心の一端を話されたが、結局座中の意見を綜合して、少しは意見の文句を挿入することになつた。

徳兵衛を演る福助君は、夜の部の「額の小さな」で繁太夫節を合方に用ふ工夫をしてゐるから、此處で繁太夫の無いのは恰ど幸ひで、訂正になつても、繁太夫節は避けて何か適當なものを窟めて行きたいと思ふ、と云つた。それ

から、徳兵衛が、内儀に引止められて心は房の方へ飛んでゐるまゝに、出鱈目の逃げ口上を云つて、早く此場を外そうとする、近松獨特の妙趣向のところが、内儀が酒をつけやうといふと

おきや〜もう歸る、此ごろ酒があつて今も今女房共、生薑酒食べさせやうと手づから生薑おろすやら〜では茶でも進ぜうといふに對して〜狼狽して〜いや〜此頃は茶があたります今去る方で生薑茶をくれたを、やうやうと逃げ延びた是非歸して〜と云ひなほ兄が出て来て、心あつて無理に徳兵衛を引止める、益々焦立ち、狼狽した徳兵衛は、何が何やら殆んど口から出まかせに逃げ口上を云つたが遂に逃れ切れず、遽かに疝氣が起つて痛い痛いといふ逃げ口上になり、それなら小座敷へ炬燵をしやうと内儀が云ふ、又そこで口拍子に〜いや〜今年の炬燵はいかう人にあたります、今も今女房共が生薑炬燵しかけて、やう〜詫

言いたした〜此間の文句も非常におもしろいが、あまりに度重なつて臺詞で云つてゐるは、却つて妙味を失ふかも知れない、それよりも寧ろ減らした方がよいと思ふ、殊に生薑炬燵まで行けば出鱈目の逃げ口上といふことは解るが、生薑酒に續いて生薑茶では洒落文句が、事實さうしたものがあつたのかと若い見物などに誤解を抱かせては不可いから、炬燵は保存して、茶の方は省いてもよいと思ふ、といふやうな細心な注意をする。

次はいよいよ此狂言の中心點である炬燵の件に移る。
一人取り残された徳兵衛が、脂粉に匂ふ寝團圓を抱いて、閨怨の情に悶ゆる邊りは、艶美を極むるところ、
夢とはなしに現なや、顔を並べて見るやうで、抱きつけば小夜蒲團、涙に濡れて冷や〜と、髻ほどけて身に觸るその夜の心地し〜と、一人こころはエ、曲もない〜ア、大幣のこの蒲

記の會究研演上『筒井重』

團小六も寝つろ小夜も寝つらん、房も寝やう、引く手数多に何處の誰れ奴と寝くさつた——打ちたい踏みたい叩きたいゑい——これい踏むな蒲團に科もない——これ等の妙文は既に幾多も轉用されて人口に膾炙したところ、さうした徳兵衛の痴態は上方歌舞伎獨特の和事型であつて、これと同じやうな型は有名な廓文章の伊左衛門の科にも應用されてゐる。今度の演出が何ういふ風に福助によつて工夫されるかは、此研究會以外の題目であつて、單に福助君一個の工夫に俟つ可きものだが、伊左衛門とは別様な型が今度こゝに實現するわけなのである。それから芝居は進んで、房との出逢ひになり、二人は既に死を覚悟したところへ徳兵衛の兄が来る、房の隠し場所に困つて、無理に炬燵の中へ押し込んで隠す。それを悟つた兄は二



(て於に邸井白竹松夜日八十二月十)々人の會究研松近

人を懲らしめの爲めに、房の中に居ることを承知で、内儀に命じて炬燵にドン／＼と火をつぎ足す。徳兵衛は己が身を焼かれるやうに思ふ。房は現在火責めに會つて氣も遠くなる。これは作者近松の趣向では當時の竹本座の敵の豊竹座で、八百屋お七の芝居が當つたところから、その狂言に對抗する爲めに、同じやうでも又別様な火責めの趣向を用ひたのであつて、さういふことも見物心理を煽り立てたに違ひはなく、今も昔も競争といふことは、おもしろい結果を生んでくるものと感心せられる。而しそれは人形芝居でのこと、今度は人間の芝居だから、炬燵の中へ大きな衣裳や鬘を着た大の男一人を隠さねばならぬのだから、道具にも演出にも大分の苦心を要するところで、これは見物からは氣のつかぬやう、床下へ身軀を隠すや

記の會究研演上『筒井重』

うに切穴といふのを造つて巧く演つて行くことが出来る筈である。だから見物は御心配は入らない。やがて身も魂も變かる、思ひをした二人、死の覺悟に一層の情炎を添へて、一気に死出の旅路へと急ぐことになるのである。二階から屋根傳ひに手を取り合つた二人は魂も身に添はず、危い瓦屋根をつたふ、幕切のかうした場面も餘程かわつてゐる。而かも多くの死には芝居では大抵、南無阿彌陀佛が御定法であるのだが、房は法華宗だからそれに同じで男の徳兵衛の方から改宗して共に、南無妙法蓮華經を稱へて死に行くこと、なつてゐるが、この屋根上では遠く題目太鼓をかすめて聞かして、特種な気分を出すことになつてゐる。

以上のやうに一體の脚本の検討を終つて、あとの演出上の小部分に就ては舞臺稽古に再度同じ顔觸れが立會つて萬般の遺漏なきを期することになつた。尙此芝居の重井筒の階下と階上との

二場の舞臺装置は松田種次君が擔當して、特に囀の内情調といふ當時の氣分の横溢したものを描き上げたが、殊に原作の明文のうちに現はれてくる、六軒町の小夜格子云々に就て、舞臺上に其意味を現はしたいといふことになり實際の舞臺では原作のやうな表側から眺めた二階の小夜格子なるものは見へないが、特にこれは用ひることになつた。これは木谷氏の考證に従つて、竹子の寧ろ佗しけなものを現はすことになつてゐる。

序でに書き添へて置くが、既に御承知の人には必要のないこと、此狂言の書卸は、寶永元年四月十六日竹本座上演で、近松門左衛門としては、最初の心中物「曾根崎心中」に續いてのもので、即ち初期の心中物に屬する。芝居や淨瑠璃で既に諸君の目や耳に訴へられてゐる紙治とか梅忠其他同型ものは澤山あるが、すべて此重井筒の趣向や思想がいろ／＼に轉用されてゐると

ころがあり、それが圓熟して今日に至つたのである、ところが、この重井筒はさうしたものよりも、又優れた妙味があるにも拘はらず、多く顧みられずに、殆んど上演から遠ざかつてゐるのはどうした譯か、それ等についても、いろ／＼研究題目があり議論の餘地もあるであらうが、今度の上演を機會に此上の研究が遂げられる可きものであらうと思はれる。

(第四頁より續き)

ヤケ氣味、とほけ氣味としてアツサリ片づけて良いやう、例の徳兵衛さん、へーエと振り向く俄式に墮ちず、眞に原作に描かれた徳兵衛の性根を掴み得るかは興味ある問題であります。大阪に育つて上つた近松物です。如何に時代が隔つてもやはり大阪の人が一番よく理解し一番よく演出すべきではありませんか。私はこゝうした意味で兩氏の努力を喜び、猶河内家はじめその他の諸優にも同様の奮起を切望する次第であります。

水右衛門役者

倉田啓明

十一月の中座で、龜山の仇討が上演されるさうだが、鶴屋南北の例のグロ味タップリな「敵討龜山鉾」をやるのか、それともこれまで緞帳芝居でやつた、「敵討龜山噺」の方なのか、ハツキリしたことがわからないので、私見をのべるに都合がわるい。しかしいづれにしても、食満南北翁のアレンジださうだと聞くから、おもひ出すまゝに、漫談と出かけよう。

南北の「龜山鉾」は、左團次のために、先年巖谷三一氏が脚色したが、まだ上演されたことを聞かず、過般、前進座が先鞭をつけてしまったやうだ。私も見ておきたいとおもひながら、つい見ずじまつたが、私もかねて南北原作どほりの「龜山鉾」をぜひ見たいと望んでゐたのだ。

岡鬼太郎氏の作で、「敵討龜山話」といふのを、よほど前に新富座で上演したが、この時は、中車が敵役の赤堀水右衛門に扮して、石井兵助を返り討にして、双盤入りの鳴物で、傘をひらいて花道の引込は、なかく「おもしろく、いまでもよくおほえてゐる。脚本も極めて簡潔でお得意の七五調のあざやかな臺詞を駆使して、さすがに岡氏のものだと、敬服したことがあつた。

ところで、在來の「敵討龜山噺」——これは、私の少年時代道頓堀で最初に見た芝居だから、もつとも思ひ出の深いものだ。小屋は辨天座で、時は明治三十四五年頃、なんと古い話だ。その時、どんな役者が入つてゐたのか、さつぱり覚えてゐないがひとり亡くなつた尾上卯三郎がゐたことだけは、よく記憶してゐる。その際は晝夜二部興行で、晝の通し狂言だつたとおもふが、かなり長い芝居で、今から考へると、だら／＼した退屈なものだつたらしい。返り討といふ歌舞伎特有の殘虐美の場景も、一向印象にのこつてゐない——といふと、それは子供の時だからだと言はれるかもしれないがどうして／＼、その時分、中座の鴈治郎一座で上場した「玉櫛箱崎文庫」の紅葉上人鉾の熱湯責の殘忍きはまる光景は、あ

りく〜と今も印象にある。

さて、龜山の仇討の話だが、敵はいふまでもなく赤堀水右衛門——だが、南北の「龜山鉾」では藤田水右衛門になつてゐるしかし、實説ではやはり赤堀が本當で、醫者遊園のどら息子だ。いづれにしても水右衛門は凡そ仇討物も數ある中で、もつとも寡悪な大敵といふやつで、大抵の芝居だと、討つ方が主人公であるべきものを、この芝居はどう考へても討たれる敵の水右衛門が主人公である。それだけきたい、役で、南北が例の鼻高幸四郎のために書卸しただけはあつた。つまり爾來、「水右衛門役者」といふ言葉が残つてゐる所以であらう。むかしはそれほどこの龜山の仇討は、しば〜方々で上演されて有名であつたものと推察される。

残酷といふ點になると、「天下茶屋」や「崇禪寺馬場」より、見方によればはるかに残酷な返り討につゞく返り討だが、また一方からいふと、この仇討はまことに變な仇討である。なんと

赤堀水右衛門

實川延若



なれば、水右衛門が石井兵衛を殺害したので、兵助兄弟が仇を討つのは當然すぎるほど當然だが、しかしその後、兵助等は水右衛門の父遊園を討つてゐる。すると水右衛門からいへば、兵助兄弟は父の仇だ。仇討の堂々めぐり、佛者の所謂六道輪廻、まことにへんなものだ。さうかとおもふと、水右衛門の母を囮につかつて誘致し、返り討の手段としてゐる。水右衛門が棺桶を破つて白装束であらはれ、返り討にしてにつたり笑つてひつ込むところは、芝居で見るともつとも興味のある場面だ、また兵助の妻が遊女になり、死んで幽霊になつてあらはれたり、ふたりの間に一子があつたり、ひどくかせのか、つた芝居だが、どつちにしたつて、陰慘で終始し、大詰の勢州龜山の仇討本懐になつて、やつと見物がほつと呼吸をつく。

今度は延若が、水右衛門役者かも知れないが、あのづんぐりしたところ、どうかすると安達元右衛門と間違へられはしまいか——東洲齋宮樂系がくところの、鼻高幸四郎の似顔繪を見ると、今のところ水右衛門役者にその人なし、左團次では少し愛嬌があり過ぎるし、中車はやることにツツはないにしても、大南北の水右衛門ではなからう。もしこれを鷹治郎が氣をかへてやれば、立派な水右衛門役者が出てくるだらうと、私はひそかにおもつてゐる。

「天下茶屋」の當間三郎水右衛門よりは、やり甲斐のある役だ。



敵討龜山噺

舞臺見たまゝ

春廻家

賑やかな神樂に、打ち込む拍子木の音も冴やかに先づ歌舞伎らしく幕が開くと、其處には震花のお貞の方を中心に、竹千代、松千代の兄弟はじめ侍臣腰元がズラリと並び、巫子のお鈴が神樂を奏して居る、コレは遠州濱松の城主名越家の忌明けの神樂で、それが濟むとお貞の方は「名越のお家の吉例として、社前に於て家督の定め、竹千代にはお付人たる赤堀水右衛門、又松千代には石井兵衛、兩人竹刀打の勝負を以て家督の繼目……」

と何事も八幡の神慮に任せると云ふ、松千代は既に亡き先夫人の腹に出来た長男なのだから禁治産でもしない限り當然法律上相續権がある譯だが、生き残つて居る愛妾のお貞の方にして

見れば、妾は後妻だけれど、前と後の違ひこそあれ妻は妻だ」と家中の上主人面高く指圖すれば、増して我が腹から生み落した竹千代に相續させ度いのも人情づくだ、處が忠臣剛の代表者三木重四郎(吉三郎)が進み出て、「兵衛病に身體も自由ならず、何卒一子兵助を以て今日の名代……」と泣きを入れるが、「そりや成りませぬ」と怒ちお貞の方からキツパリと斷られて仕舞ふ、畢竟お貞の方は兵衛の病氣を幸ひとして、水右衛門の勝利に依り我が子に家督を取らせ度く、即ち竹千代派が敵役で、松千代が立ち役と、簡單明瞭に色分けをして置いてあとの筋

をグンぐ運んで行く手法は流石大南北の理智の鋭さが窺はれる、石井兵衛(橋三郎)は病を押して竹刀打の役目大事と出仕した、赤堀水右衛門(延若)も来た、双方慎重な態度で竹刀を執つて立つや丁々と二三合、左右にバツと離れての大見得、もふ舞臺一ぱいに古典味が這ひ廻つて居る、美しい兵衛の娘お時(お總)が玉垣の陸に姿を見せて水右衛門に手を合すと水右衛門はそれを見て一寸思入れ、其の間に兵衛が打込三郎)が「石井兵衛殿正しく御勝利」堀口「これにて名越の御家督は」木村「今日よりして松千代君」片山「即ち竹千代君は御分地たる」岸本「勢州龜山へ御發向」三木「双方目出度き晴の勝負」今村「御祝儀申し」一同「上げまする」

と頭を下げたが、下げられたお貞の方は頗る不平らしい、「水右衛門、それ出や、ズ、ズ、ズ」と出や……と語氣も眼色も甚だおだやかで

ない、「日頃武藝に鍛練と思ひの外なる只今の仕合……」愚痴と涙と口惜しさが一緒に成つた揚句は遂に水右衛門に「碌を召上げ追放申すつけます……」と大變な劍幕に、敵役組は顔を見合して驚いたが、そんな事にお構し無いと云つた風に神職の杉山丹下(篤正)が「御家督繼目の御儀式、滞りなく相済む上は、改めて神前にて、奉幣勤めて御ざりませう」

うや／＼しく云えばお貞の方も憤りを押え立ち上り

「思えば望みも……」
三木「エツ」

お貞「イヤ皆も一緒に」

と唄に成り、一同を引連れて社殿の方へ這入る、あとは赤堀水右衛門一人、お時はツカ／＼と走り出て、「赤堀様、有難う存じます」と手を衝いた、其の手を赤堀は握らうとしたが、お時は素早く引込めて終つた。

水右衛門「お時殿、御満足であらう……」

お時「ハイ、私の願ひをお聞き届け下さりまして、此の如な嬉しい事はございませぬ」

「御親父兵衛殿は兎角に、此の水右衛門を嫌はれ、たび／＼破談々々と申され、今日とても列

座の中で彼の如に云ひ出されたが、お時殿には恐らく變る心はござるまい。今日の頼み、竹千代君の跡目相續破れても許婚の縁を破らぬ勝負の一手、水右衛門の心中は、よう解つたであらうな

お貞の方に頼まれて竹千代擁立を誓つて居ながら、お時が戀しい計りに裏切つて仕舞つたのだ。

「たつた一ツの戀故に總てを捨てる水右衛門……」と大變なほせ方である。然るに此の時上手の蔭で兵衛が「イヤ時との縁組は叶はぬぞ」と毅然として出て来る。

水右衛門としては兵衛に對し一〇〇％の好意を示して居るのだから義理づくから云つても、無縁結婚が出来ると、信じたに不思議は無い。處が兵衛に云はせると「其心が汚い……」と云つてにべも無く水右衛門をこき下ろし、お時の手を取り連れ戻らうとする、

水右衛門「兵衛待て」

兵衛「ナニツ」

水右衛門「扱ては女と云ひ合せ、此の水右衛門を深い處へはめをつたな、へと怒る、至極尤な事だ」

「自ら墓穴を掘るのたとえ……お身には丁度よい事がある、大小捨て、町家の交はり、算盤はじくが似合か……」

年寄の冷水、よせばよいのに兵衛つまらない捨合詞をのこして去つて行く、と直ぐ宮城(延郎)小田(市昇)曾根川(藤)大石(美鷹)汐路(奥山)の五人がバラ／＼と出て

「赤堀氏、嗚御無念で御座らう」

と右左から煽動したが、水右衛門は靜かに思案に暮てるので、五人は松千代を毒殺しよふの、忠臣どもを片ツ端から殺さうのと、ギャング的な事を進言するが、水右衛門は愈々黙りこくつて

答えない、五人は遂に疝癪を起して



香樹院の場
石井源藏 魁車
妻お時 芝鶴

宮城「云ひ甲斐の無い水右衛門」
曾根川「もふ先生とは申すまい」
大石「門弟の吾々から師範にいとまを」
五人「呉れてやるわ」

と罵つて去るを、水右衛門と見送り、立上るのが木のかしら、神樂大鼓の音につれての思ひ入れ、河内屋の顔はもふすつかり古典味をたゝえ切つて居る。

電気が暗く成つて道具が變ると、此處は屏が嵐の念佛堂の前、本釣鐘に水の音が青々とした光線の中を流れて淋しい舞臺、其處をお時は若黨の袖助(八百藏)と共に病父の兵衛を介抱しながら來る

「父上様、お氣を慥におもち下さりませ」
「あゝ、よいゝ、サ袖助、提燈をやれ」

と兵衛は苦痛をこらへて行かうとする時、念佛堂の中から水右衛門、物をいはず近づいて提燈を切り落す、と同時に袖助を一刀に斬り、返す刀で兵衛を斬る。

「言葉もかけず何奴ぢや」

「破談を受けた赤堀水右衛門だわ」と前の場とは打つて變つた悪黨振りだ、父の痛手を介抱しあふとするお時の手をグーツと捕え

「動くな女、筆と舅の縁もろ共、老ぼれを斬つて捨て、女は身共が連れて行く」
「扱てはこれに待ち受けて……と兵衛は齒噛みをして口惜しがる。

「哀れ處も念佛堂、感燈明のたゞ一筋、冥途へ行つてあの世から、夫婦仲よく暮すのを、地獄の釜から見物おしやれ」
「エ、人非人め、娘は渡さぬ」

とよるばいながら近づくと、又一刀斬り下げ

「アレツ、父上を」

と驚いて走り寄らうとするを、引抱え

「出世の道も捨てかねに、女に迷ふ水右衛門、すぐな心も横合から縁を切る氣の老ぼれめ、同じ家中の藤川右内、其の弟の源藏にくれてやるとは皮肉な縁組み、破談の恨み、意恨の仕かえし」

「何を……」

と兵衛が叶はぬ迄もと切りかけるを、あべこべに美事に斬る。

「是で少しは腹が癒えた」

と刀をおさめるすきに、お時は死骸の方へ走らうとするのを水右衛門は引放して、グツと睨

む、もう鷹の前の小雀に等しい、バタ／＼に成つて若黨中野藤兵衛(壽三郎)駈けて來る。

水右衛門と二々言三言、水右衛門は愈々不敵にお時を連れて行かんとするを、さうはさせじ

と藤兵衛が必死で引戻す、それを拂つてキツと見得、其處へお時の兄の兵助(三津五郎)が急ぎ足で駈け來たり

兵助「藤兵衛此の體は」

藤兵衛「若旦那様、赤堀水右衛門は親旦那様の敵……」

と聞いた兵助は忽ち赫つと成り「水右衛門其處一寸も動き居るな」

と斬つて行く、藤兵衛も勿論刀を抜いた、水右衛門は左右に敵を受けて不利と見るや念佛堂の燈明を消す。忍びの合方よろしくだんまりと成り、水右衛門は花道へ、舞臺は例に依つて例の如く、水右衛門の引込みに古典歌舞伎の異色を見せて、滿場はワーツと感嘆のドヨメキをあげ間に暮し。

二幕目 由井驥藤ヶ茶屋

其の名の如く藤の花が、美しく咲く藤棚下の茶店、由井の海は春の色に光る明るい舞臺。

正面に、高札がある、それには意味の次第あつて五ヶ年以來濱松表に於て名越藩中石井兵衛を討つて立退く、某、當時當所柳塚にまかりあり、石井一家の者此の高札に眼を觸れなば敵討に來らるべし、尋常の勝負「可仕候」としてある、勿論水右衛門の建てたものだ、之れを猿廻しや、大工や、旅僧達が取圍んで種々な噂をして居た、醫者の卜庵（九團次）が見舞に來て奥へ入ると、石井兵衛と若黨の中野藤兵衛が高札の噂を耳にしたのであらう、急ぎ足で駆けつけて來た。

一年月たづねる敵の在家、我と我が手に教えし上は猶豫はならぬ藤兵衛つゞけ

とはやるを制して藤兵衛が、何か企みがあつてはいけないから一應見届けて來よふと兵衛を殘して柳塚へ走つて行く、兵衛は「羅生門」にて置きし禁札とはとは事變り、父が手曳きの敵の手が「……」

と理窟をついて高札を抜き取り、藤兵衛の知らせを我家へ行つて待つ、と唄に成り、花道に引返す。以前の卜庵醫は、病人の手當の事なぞをおふじ（延太郎）に伝付けて去る處え、お時の聲の石井源三（魁車）が若黨彌三郎（霞仙）を連れ

て出て來る、源藏は敵水右衛門搜索の第二班で兵助と別れて吾妻路を尋ねあぐんで引返して來た道である。戀女房と別れく敵を尋ねる旅千とせやの場 鳥居左近 福助 石井源藏 魁車



の鬱や、又何時迄恁奈事がつゞくのかと女房戀しきの愚痴も出たが、結極光明寺の開帳は大層な人出故、ひよつと敵に廻り合ふまいものでも

ないから行つて見てはと云ふ事に成り、二人は下手へ去ると殆んど一緒に其の戀女房のお時自身を肩入れの着物を着て小さな風呂敷づゝみを抱え上手から急ぎ足で花道へ、其のあとを旅女街の目黒屋金藏（箱登羅）が尾いて來て道を開くお時は簡単に教えて花道へ走り込んで終ふ。

「滅法美しい女だが……」と恍惚り見とれて居たが先生急に商賣氣を出して其のあとを尾けて行く。源藏と彌三郎は忘れ物をしたので戻り來たり、笠を脱ぐのか木のかしら、新駒や——と大向ふ一と頻り。

返し 柳 塚

大晏寺堤を思はせる如な道具建である、初めて太の絲が聞こえて花道から壽三郎の藤兵衛が向ふ鉢巻繩だすきで駆けて來る。そして蒲鉾小屋に近づくと、拔足しして中の容子を伺ふ。處え、三津五郎の兵助が來たり「如何に赤堀水右衛門、汝の毒手に倒れたる石井兵衛が一子兵助……」と名乗つて藤兵衛と二人双方から「出よ、出よ」と叫びかける。水右衛門はガバと跳ね起き「せくな御兩所……と大きく「高札をもつて我から在所を教へる赤堀、逃もせぬ、かく

れもせぬ、水右衛門が斯く成り果てし此の身の
述懐……とメリヤスに成り、床と台詞を半々に
分けて、罪の報ひでいざりに成つたと不幸な筋
道を述べたて「よくぞ之れまで來らねしよな」

……眞實おもてに現れて涙乍らの物語り……と
文句通りの仕ぐさがあるが、藤兵衛は信用しな
い。水右衛門は覺悟して早く首にして呉れと云
ふにも及ばず、藤兵衛は早くも刀を振りあげる
のを兵助は制止して、名越の家に家督争ひさえ無
かつたら、お互は兄弟に成つて居たかも知れな
い、それが敵同志に成つたのは、誠に悪因縁で
……と大變迷惑がつた上、自家へ來て養生をし
て呉れ、そして本復した上で改めて敵討の立會
をやらうと頗る公平な案を持ち出した。水右衛
門は恐縮して再參辭退したが、遂に兵助主従に
引取られる事に成つて、ハイザリ車をすえる……

と床の文句に尾て藤兵衛がいざり車を引出し
水右衛門「思えば過世の因縁か」
兵助「討つべき薬をあたえ」
藤兵衛「敵同志の情のしがらみ」
水右衛門「廻る因果の片輪車」
兵助「引くに引かれぬ此の場の成行」
藤兵衛「是非も無き」

三人「約束ぢやなア
互に目と目、顔と顔、まつわる奇しき因果
車、つな手をたぐる柳塚ともないてこそ
と三重よろしく此の道具が變ると今度は愈
である。

山本村の浪宅

兵助の妻お雪(多賀之丞)が針仕事をして居る
醫卜庵(九團次)が一と問から、ついでにお時も
來る。例に依つて例の如く、病人には人參を飲
ませれば癒るのだが、料金は五十兩だと云ひ去
る、武士道を立てる爲めには其の身を苦界に洗
めても……と大變な決心まで仕かける處え、尋
ね人に事を構え厚くましく上り込み、子供を抱
える爲め、五千兩用意して來て居るのに、遂う
く無駄になりました……と問はず語り、お雪
は聞くより天の助け……と思つたかどうか知ら
ないが、兎に角身賣の事を話すと、金藏は「此
奴ア飛んだ堀出しもの……」と直ぐに手を叩い
たが、お雪のちんばに氣がつくと吃驚して金を
引込めた、それから二人の押し問答を聴いて聞
て居たお時が駈け出して「どうぞ姉さんの代り
に、私を奉公にやつて下さいまし」と涙乍らに

頼んだのである。金藏は素より前の場跡を尾
けた程のお時の事だから二つ返事早速取引に
かゝらうとするのを、外で聞いて居た藤兵衛が
「そりやなりませぬ」と中に入ると金藏は「オ
ヤ、藤兵衛ぢやねえか」金藏は元三水の邸に居
た仲間なのである「憎む可き仇敵の病氣を癒し
てやる爲に、身賣をするなぞは馬鹿氣て居る」
と云ふ藤兵衛の意見は至極尤も千萬だ、然るに
兄の兵助は涙乍らに「コリヤお時、氣の毒なご
らしばらくの間……」と敵討の爲に一人の妹
を犠牲にする事を決意したのでこれを一と問の
中で聞いて居た水右衛門は轉び出て「藤兵衛刀
を貸せと云ひ、之れ程迄に迷惑をかけるかと思
えば未來も恐ろしいから切腹して死ぬと云ふの
である。死なれて終つては敵討が出来ないから
と、兵助は一生懸命になだめて此處に愈お時
の身賣は成立する、お約束通り駕籠が來る、別
れの愁膽よろしく、おかるならぬお時は駕籠に
揺られて花道へ、あとに残つた人々は鳥渡氣援
けたよふになると、兵助思ひ返して「早速な
がら卜庵の處へ行き……」と藤兵衛に命じるの
で、藤兵衛はあとを慕ふ兵助の一子牛二郎を脊
負つて水右衛門の爲め薬を注文に出て行く、兵

助は肩が凝ると云つてお雪と共に奥へ入る、本
釣鐘の音がして、鐘の音さける薬家の軒、怪し
の人影、ヨ、と……

醫下庵が頓冠りして忍び出る、續いて藥籠持
松藏(市昇)も来たり「裏から忍んで……」と二
人は忍び込む、蔭で兵助の險しい聲で「何奴……」
と叫びざま、バタ／＼になり二人を追つて

出る、はげしい立廻りの後兵助が障子を背るに
構えると、其の障子越しにいきなり一突き、兵
助はバツたり倒れる「ナ、何奴ぢや、手勢を
頼み欺し討とは卑怯な振舞」と無念のこなし、

水右衛門は大いに圖太く「いざりし人にくらま
ぎれ脊負込んだは現在の親の敵の水右衛門、大
勢寄つての介抱も恩に着なれた古わんぼう、洗
ひかえても心の曇り、今に性根に變りは無いら
イ」と悪たれ口を聞いて、叶はぬ迄もと討つて

かゝるを又一大刀、下庵も松藏も右左から兵助
をなぶり斬りにする。水右衛門は件の五十兩を
懐中に入れる、處へ藤兵衛が半二郎を連れて戻
つて来るので行燈の灯を吹き消してだんまり模

様になり、水右衛門は外部へ逃れ出る時に、訪
ね来る源三にばつたり出會ひ驚いて地上に伏す
源三は怪しと見送るキツパリの見得で幕は引か

れる。水右衛門幕外で、ぼつと胸を撫でおろし
懐中の五十兩をさぐつてニツコリした。けれど
未だ後から藤兵衛でも追つては来るかと思ひ
しつ、五十兩の小判を数へながらの這入り此處
河内や近來の大出来なり。

關のちとせや

用意周到な赤堀水右衛門は、既り此の千歳や
へ迄も其の手を廻して居た、前幕の騒動後、藤
兵衛から一分始終を聞いた源三は悲みの間にも
せめてお時を苦界から救ふと、實兄の許で金策
して此の關へ身受に來たのだが、土地の不頼漢
から喧嘩を吹つかけられ閉口して居る處へ、龜
山藩中の鳥居左近(福助)が來たり一同を追拂ふ
龜山は名越家の妾腹、即ち家督争ひの根本の人
竹千代が伊勢守忠繼となつて納まつて居るので
ある。其の事を語り「御用も御座らば」と心添
へをする時にお時が二階の障子をあける、

同座敷

「戀はくせ者、戀は女子の癪の種」と獨吟で
二階の小座敷に癪に惱むお時を源三が介抱し
て居る。お時は良人源三の留守中苦界に洗んだ

事を詫びたり、嘆いたりした。源三はそれをな
ぐさめ、怨み重なる水右衛門を必ず探して兄弟
夫婦の仇を報ゆると誓つた。其處へ主人の興吉
(吉三郎)が來り、此處で身受話しは纏まつた。
話の序に清吉が、昨日中野とやら云ふ者が來て
小よし(お時の事)について根問ひ葉問ひした
上、明日にでも興吉に來て呉れと云つて、所書
を置いて行つたが、お心あたりは御座いませぬ
か」と尋ねた源三は、中野藤兵衛がもし此の地
へ着いたものと早合點して

「サアお時、仕度しや」
「云ふに云はれぬ我が心、願ふ逢瀬をまつに
かはらじ
と獨吟のあげて、暗轉となる。

驛はづれ庵室

荒れ果てた無住寺の夜は青い夜の光線の中に
物凄しい。

「更けて行く、人さえ住まらず荒れ果てし香樹
院の秋の庭、折しも此處へ忍びくる」と下庵が
忍ぶと擦りて心せくまゝ源三夫婦……と床に
連れお時の手を引き源三が出て来る廊下傳ひ、
運ぶ足を縁下から下庵が斬る。呀と源三は倒れ

た、お時は驚いて「どうなされました」と介抱する。此の時奥で「源三夫婦来たか、中野藤兵衛、先刻より待つて居たわ」正面の席を切つて落すと其處に赤堀水右衛門が立つて居る。

源三は「絶へて久しき此の對面、養父の仇、兄弟の敵尋常に勝負いたせ」と云つたが源三は既に身體の自由を失つて居るのだ。お時は身も世もあられぬ思ひで、懷劍引抜くと共に素早く水右衛門に斬つてかゝる。へ人にもまれて蒼の花惜しや亂れて盛りもすぎたが、却つて深い情もあらう、昔の縁に取り戻す此の赤堀が女房「お時」と抱えるを「え、けがらはしい……」と

身をもがく「人我につられれば……」と赤堀水右衛門、遂に床の縁につれて、源三とお時迄も井戸の中へ斬り込んで仕舞ふ、結構なふなると赤堀の戀なんてものはつたりで、然の方が深いらしく「お時の身の代は……と與吉の手から取りあげてバツサリ、ト庵も又バツサリ、誠にアツサリと片付けて仕舞ふ「悪事に加擔の與吉ト庵、天の成敗……」は些とばかり圓々敷過ぎる。彼は五十兩懷中して「闇の夜に鳴かぬ鳥の聲聞けば都々逸の上の句に似たつらねだ一人、二人と指えて、丁度八人、フ、フ、と笑ふのが木のかしらで、此の水右衛門の這入りこそ實に

古い錦繪を見るやふな、扱てこそ南北物としての特色を遺憾なく見せて居る。

大話 龜山城外

城遠見、て下手の方に竹矢來がある、此處に前幕の鳥居左近と竹千代の伊勢守、其他家臣がズラリと居並び、可憐な牛二郎が白装束での敵討目出度しをはぶいて、水右衛門の落ち入りで幕に出るが、あの長い龜山話を、短い時間に引つめて、大南北の古典味をいかに無く味はして呉れたのは、近頃有難い事であつた。

洋酒界の革命兒……國産洋酒の逸品

國産金鶴印

アウラキンスデキ
 ベルラモンツ
 キュルミラソ
 ジェパルミソ
 滋養葡萄酒



元 發賣 商店
 横山 式社
 株會
 大阪市東區豊後町番地
 電話東(94) 一六六一
 三〇一三
 四六四九

『小さん金五郎』俗説

西尾福三郎

濱松歌國の「南水漫遊」に記された所によると、額風呂の小さんと金屋金五郎が心中したのは元祿十四年九月の事だと出でゐる。今回上演の「額の小さん」は多分大森氏の脚色になる。それだらうと思ふが、これは大正十一年四月の浪花座で延若一座が「小さん金五郎」と題して上演した事がある。小さん金五郎物の傍系としては「雁のたより」や「鳥目の一角」等現今でも時折上演されるが、今回もさうした芝居の戸籍調べは止しにして、俗説小さん金五郎と云つたやうなものを書いてみよう。

南水漫遊の記録を實説だとすれば、それと最も相違してゐるのはこの物語の二人は心中しない事である。その次第は何れ後段に述べる。魂抜けてトボくと河庄の行燈の影へ小春を慕ふて迷つてきた紙屋治兵衛の役を十八番にしてゐる井筒屋實川金五郎と、島の内額風呂の抱へ小さんとの悲戀物語。

金五郎は播州の旅興行でこの紙治を演つてゐる時、額風呂の女將の悪企みによつて、飽きも飽かれもせぬ仲の小さんから愛憎つかしをされたものと早合點してカツとなり、それ以來舞臺で演じる紙治の役が今迄以上に眞に迫つて、金五郎の治兵衛か治兵衛の金五郎かと云ひ囁される程評判になつた。

大森氏の作る所の芝居は確かこの旅興行の樂屋が序幕になつて物語りが初められるのだと記憶してゐる。

金五郎と小さんは幼い時から云號の間であつた。小さんの父は奈良の春日神社々家の中でも相當有名な家の家臣であつた。それが朋輩の讒に會つて小さんが三才の歳に浪人した。それから父は五人の案内を引連れて大阪へ移り住んだ。その時分近所に住んでゐたこれも中國筋の浪人で山住嘉平と云ふ人があり、その次男に生れたのが金五郎で、小さんが十三金五郎が十七になる迄この二人は仲のよい遊び友達として育つてきた。さうした間に小さんの父は大病を患ふ、兄は荷車に足を轢かれて跛足になる、その他様々な難儀が重なつて蓄へた金銀が盡きてしまつた。その上終に父は歿し母一人七才を頭に三人

の幼兒を抱へて路頭に迷ふ許りの所を親切に世話してやつたのが金五郎の父である。

小さんが十六の春世話する人があつて島の内の額風呂にサービスガールとなり、以來數年経つて或時中の芝居で淺尾工左衛門阪東のしほ一座の忠臣藏を観た事があつた。その時千崎彌五郎に扮して舞臺へ出たのが昔馴染の金五郎であつた。茲に於て二人の縁は再び結び合された。然るにその頃小さんのパトロンに天満興力の物頭牧田市郎兵衛と云ふ人があつた。果然一介の驅け出し役者金五郎は當事の刑事部長牧田をライヴァルとして持たねばならなくなつてしまつた。そんな成行で體よく牧田から大阪を追ひ出されて田舎落ちの途中、後を追つてきたお茶屋の手先のカラクリで金五郎は小さんとの縁を切らされてしまふ様な馴染と墮いた石はと云ふ歌もあるが、併し對手は客商賣のバスガール(女車掌ぢやない湯女だ)そして男は當事羽振りの強持で旦那衆。さう思ふと金五郎は一圖に女の變心を憎み怒つた。併し又一方様な馴染と云ふ根強い戀心の募つてくるのを何うする事もできなかつた。そこで何とかしてもう一度大阪へ舞戻り女の本心を掴みたいと焦慮したが、興力の手先は油断なく彼の行動を見張つてゐて迂濶に近寄る事はできなかつた。金五郎は戀に煩え持病の鳥目に惱みつ、半ば衷心し乍ら島の内へそつと姿を現はした時義候な旅客木野屋音藏が情ある計らひで小さんに會ふ事ができた。そして二人の戀に變りのない事を確

めて互に喜んだのも束の間、忽ち捕手のために捕縛された。

これが寶延二年九月半ばの事で、金五郎は一月餘り入牢の後たうく伊豫の弓削島へ流された。女も牧田に受出される間近に急に牧田がお役御免になつて其儘沙汰止みになつてしまつた以上、話の眞偽は今茲で追究の限りではない。が、もし河庄の店先へ忍び寄つた治兵衛が人眼を憚るお尋ね者であり、更に永い間の戀の惱みに眼の光りを失つた病人だつたとしたら、この悲劇は一層物の哀れを加へるであらう。謂はゞ小さん金五郎はさう云つた筋の芝居である。二人の間の戀を割かれ、自分の藝術を犠牲にし、遂には失明の苦杯を嘗める許りか、最後には我が戀敵の繩目に縛られなければならぬ。この上心中と云ふ大詰があつては餘りに悲惨すぎる。

今回の「額の小さん」の内容に就いて筆者は何もきいてはならない。従つて如何なる場面になるか全然興り知らないでこの一文を書く事になつた。だから或は芝居とは見當外れの事を書いてゐるかも知れないが、ともあれ巷談小さん金五郎としてこの一篇の筋立てだけを紹介する事にした。

何れにしてもこの芝居は、同時に上演されるお房徳兵衛の芝居と共に、その頃の島之内情緒とも云ふべき氣分を十二分に満喫させてくれる點で、大阪獨特の和事芝居として「お妻八郎兵衛」や「宿無し團七」等と俱に珍重すべき狂言である。

花柳 談 お名残り 二道筋

其後のおすが一家ですが、喜代子の骨折りが夫將吉は阿久津の店に勤める事になり、おすがはおすがが家政婦として、又長女の松枝は小間使として同じく阿久津家に働く事になったのです。で、どうやらおすが一家にも亦幸福な平和な日が訪れるやうになりましたが全く世の中の有為天變、人の一生と云ふもの程計られぬものは有りません。

今まで何の世間のせちがらさ苦勞と云ふものも知らず、ぬくぬくと幸福に恵まれて来た鈴村にも、遂に破綻の日が来たのでした。それは彼が桂子の旦那として、月々莫大な金を桂子の爲に費してゐたのが、新戚間に大問題となり、一族の人々は彼を目して救はれ難い放蕩兒不所存者となし、遂に彼をして、準禁治産の身になさしめて了つたのであります。全く昨日に變る今日の身の上です。彼は今生れて始めて、物質と云ふものゝ如何に大切で、又如何に威力のあるものであるかと云ふ

事を、沁々と味あはされたのでした。然し、此の物質的の苦痛と云ふものよりい上、彼の心を悶えさし、暗くさせたのは、如何にすれば愛する、あの明るい桂子に、自分の現在のこうした身の上を知らしめずには置かれないであらうか、又どうすれば何も知らな

いと悲しみの淵に投ぜずに済まされるであらうかと云ふことでした。其爲め鈴村は、阿久津から恥からぬ金をも借りるやうになつたのです。彼に對する阿久津の態度こそ、實に紳士の中の紳士とも云ふ可き人有りました。阿久津は既に萬と云ふ大金を鈴村に貸しながら、過去の事は更に口にすらせず新に又五千圓と云ふ大金を彼に與へるのでした。こうした阿久津の心の中には、死に身になつて桂子をして愛してゐる鈴村を、或る意味に於て徹底した勇者であるとして深く感激させられる或物が存してゐると共に、これに反して人を愛すると云ふ事すら、絶へず周囲を顧み

てしなければならぬ自分自身と云ふものを取し事だと思ふので有りました。事實、現在の阿久津は喜代子と昔の如き關係に立ち歸る、絶好のチャンスに置かれてゐるのでした。それは、妻の類子を離別したからです。然し社會的名譽、地位はそれを許さないもので有りました。勿論これには、如何に非は妻にあるとは云へ、妻に破綻の嘆きを興へて、己れのみが我慾を満たせようとするのは、慘酷であると云ふ——彼の道徳觀にも依るのでせうが……

話は變りません、鈴村のこうした苦しみも知らず、相も變らず云ひたいほうだい、仕度いざんまいな幸福な日を繰返して居たのは桂子でしたが、遂に喜代子の口から、總ての事實が告げられます。其時の桂子の驚き、悲しみと云ふものは他に見る眼もいぢらしい程でありましたが、雄々しくも彼女は、例へ如何なる事があらうとも、斷じて鈴村とは別れぬ、と云ひるのでした。こうして物質の恵から見離された二人の仲は益々愛の力に依つて固く結ばれて行くのです。……が、妻を去つた阿久津と喜代子との仲は、どうした道を辿り行くのでせうか……。

瀬戸英一作

花柳巷談 追善二一筋道

「二筋道」は上演の度毎に非常な好評を得た。此度、上演のものは阿久津謙三を勤めて居りました新派劇壇の巨星、今は亡き伊井蓉峰をしのんでものされたものであります。

第一 喜代次の家 第二 待合登喜代の座敷 第三 元の喜代次の家

喜代次の親友おすが、桂子、それに桂子の旦那鈴木等は、阿久津の妻の死後極力喜代次と阿久津を夫婦にさせやうと努力したのですが、二人は互に心と心で愛し合ながら、浮世の義理の枷に遂にそうした仲にならずに終つたのです。そして喜代次は却て菅澤と呼ぶ人に將來を託し、其中に子供さえ設けられたのでした。是は勿論阿久津の未だに健在中の

事、彼女が菅澤の世話になるやうになつた事に就いては、阿久津も彼女の未來が堅められたのだと深く喜んでゐたのです。

ト、此處に遇らずも起つた事は阿久津の死で有りました。阿久津は信州にある自分の製紙工場を見巡りに行つて、其處で病を得て再び歸らぬ人になつたのですが、其最期の枕邊に侍して總ての介抱に盡したのは小照で有りました。小照は昔阿久津の信州の工場に働いてゐた事のある女工で、曾て東京で藝妓をしてゐたのを、阿久津の温情からひかされて親の許に歸つてゐたのです。勿論危篤と共に阿久津家の家政をみてゐるおすがは驅けつけました。桂子、鈴木も來ました、然し當然來るべき筈の喜代次は遂に姿を見せなかつたのです。たゞに其場合に來なかつたばかりではな

にもかゝはらずついで影だに現はさなかつたのです。

此の有り得べからざる仕打に對して喜代次の心に疑ひを抱いたのはおすがばかりでは有りません。桂子も鈴木もそうで有りました。此他にも喜代次と阿久津との仲を知つてゐる限りの人々は、彼女のそうした行ひに對して怒りをさへおぼえるのでした。

其の結果、一日おすが、桂子等は丁度阿久津の三十五日に喜代次を互に思ひ出深い待合登喜代に招き、膝突き合はせて彼女の本當の心を明かして呉れと追つたのですが、其時の彼女の答へる言葉の一つは、何れも座にある人々がこれまで喜代次に對して抱いてゐた好い感情と云ふものを根底からぶち碎ひて了ふやうなもののみで有りました。人々は心から腹立たしさをおぼえてゐたが分けてもおすがは姉妹同様に親しくしてゐただけに極度に憎しみが加はつて來るのでした。

喜代次の眞意それはどうしたものなのでせうか。

似顔繪羽子板

小山紅露

よしあしは最負々々のとりぐに、ここ難波津の顔見世月、續く二の矢の當り年を壽く歌舞伎の狂言盡し、永當々々御引立を押すな押繪の似顔繪羽子板、是非お運びをと賣物に花の提灯かゝげながら先は其ため口上左様。

〔谷底〕

花柳章太郎の年代

冬草の根強き女心かな

〔お名残二筋道〕

同桂子

春待つや火鉢の下の長襦袢

〔大尉の娘〕

井上正夫の森田水谷八重子の露子

父一人娘一人冬の灯かな

「長閑なる反目」

小堀誠の丸地

輕き味の中に茶氣ある袖味そかな

「人？ 鬼？」

井上正夫の熊造
梅島昇の秋子
英太郎の

この親と子等 乾鮭と鰻とかな

「追善二筋道」

喜多村綠郎の喜代次

埋火や打ちつけに云ひ出せぬ事こと

「同」

河合武雄のおすが

商賣氣捨て、師走の女房ぶぶり

「琵琶歌」

井上正夫の三藏
水谷八重子の里野

人の世の風がつめたき師走はすかな

「同」

花柳章太郎の貞次
水谷八重子の里野

泣くものに琵琶ふさはしき千鳥ちどりかな

伊井蓉峰を偲ぶ



新派の總帥故伊井蓉峰の追善興行は既に東京に於て花々しく開演されました。

目下歌舞伎座に開演中の新派總動員興行に於ても追善劇「追善二筋道」と故人が最後に飾つた「お名残二筋道」を晝夜に分けて上場、非常な好評を博してゐるのも故人生前の高徳を裏書きするものでありませう。

尙一座の人々は、初日開場に先だち去十月卅一日南地法善寺に伊井蓉峰追善法要が始まりました。寫眞は當日の記念撮影ですが本誌はこゝに一座の人々から「故人生前の思出」を頂いて、讀者と共に新派中興の祖を偲びます。

(尙原稿は到着順に掲載いたしました)

東西合同大歌舞伎

中座

晝十二時・夜五時半二部興行

晝の部

一番目 敵討龜山噺 四幕

序幕 遠州濱松八幡社前

犀ヶ崖念佛堂

赤堀水右衛門 八延市扇美扇 扇市延延
 小宮城團九郎 八延市扇美扇 扇市延延
 曾大川官兵 八延市扇美扇 扇市延延
 沙石路吉兵衛 八延市扇美扇 扇市延延
 同井兵衛 八延市扇美扇 扇市延延
 三木重右衛門 八延市扇美扇 扇市延延
 今堀村新順兵衛 八延市扇美扇 扇市延延
 片村小五郎 八延市扇美扇 扇市延延
 若山忠兵衛 八延市扇美扇 扇市延延
 同職中野藤兵衛 八延市扇美扇 扇市延延
 神越杉山丹 八延市扇美扇 扇市延延
 同名越杉山丹 八延市扇美扇 扇市延延
 後室お貞の 八延市扇美扇 扇市延延
 乳後室お貞の 八延市扇美扇 扇市延延

最後で有つた伊井さんは、どんなに俳優として満足で有たらう。「二筋道」は昨年十一月明治座の初演以来回を追ふ事前後七回それが連続的に後編々々と矢繼早に上演され實に珍らしい人氣を沸立たせた。芝居を話すほどの人で二筋道を語るにぬ者はないと云つてもいい、これは新派の記録で有り演劇史上の記録で有る。

伊井さんはそのレコードを作つた芝居の主役阿久津謙三を最後の役とし、それが伊井さん近年の傑作で有つた事を思ふと、伊井さん自からも慰めて居らるゝ事

で有らう。今度上演する追善二筋道の喜代治の臺詞に、阿久津の旦那は死んでも妾の胸には阿久津の旦那は生きて居ますといふのが有る、私はおすがの役で舞臺で毎日それを聞いて居るが、この臺詞は阿久津即ち伊井さんの事にもとれる。伊井琴峰は死んでも舞臺の伊井は生きて居る、そうして新派を守り若い人達を教へ導いて呉れるで有らうと斯う私は思つて居る。

伊井さん貴下の命で有た新派を守り若い人達の將來も見守つてやつて下さい。

伊井先生を憶ふ

梅 島 昇

伊井先生の死は、魅りかけた、新派劇に取て確に、大きな打撃でした。

關 分の喜右衛門助
乾 介の市藏郎
雲 仁の時
同 小よし實は時
女 中おか
鳥 居左も
島 居左も
大詰 勢州龜山城外
近藤 伊勢守忠繼
鳥居 佐十郎
長崎 伴十郎
近江 元仙三郎
岩崎 下元典三郎
木場 下元典三郎
小野 半次郎
中野 藤兵衛
赤堀 水右衛門

岡村 柿江作
所作事 茶 壺
熊鷹太郎
田舎者麻治六
目代丁字右衛門
長唄囃子連中
坂東三津五郎
林長三郎
中村芝鶴

所作事 鸞 娘
長唄囃子連中
坂東三津五郎

所作事 獨樂賣
長唄囃子連中

舞臺以外にも私は伊井先生に多く親しみを感じ、どんなことでも御相談に伺つたものです。

この五月御一緒に中座へ出勤した時にも御一緒に居たのに、今度の新装の歌舞伎座が追善興行とならうとは、いけません……こうお話しして居りますうちにもうすぐ涙話しになります。

未だに忘れられないお小言のうちに身にしみて居るのを一つお話致します。

それはもう十五年も前にはゆる新派總動員で九州巡業に出かけ、その打納めが小倉の芝居でした、二ヶ月越しの巡業と暮れのおしせまつての旅先き、早く東京へかへりたいが先きに立つて、どうしても落附いて芝居がして居られませう。たしか泉先生の「つやもの語」だつたとおほえます。伊井先生の玉川清が河合先生の丁山とで大詰に久世家に強請に来る處で私は篠山夫人澄子をやつて居りました。

その臺詞の受け渡しを、すっかり宗十郎さん張りか何んかをやつてしまひました。藤村君が又高島屋ばりでやつたもんです、すると打出しの挨拶に伊井先生の處へ伺ふと、頭からケンモホロロに叱られました。

「君等は樂の日を何んと思つて居る。この先何年かの後、君等が責任を持つてこの九州へ来た場合、アレはこの前新派が来た時フザケタ役者だ、熱心でない責任感のないものだ」と云ふ印象を持たれたらどうする、どんな田舎へ行つても、どん果てへ行つても樂の日だからフザケてい、理由はない。ことに樂の日にはその興行中に試みてない演出を自分でしてこそ、その次の何かの役に役立つもの、いい若い者が聲色使い見たやうな真似をして得々として居るとは實に情けない。これから後絶対に氣をつけてあんな真似はしないやうに……」と懇々と説法され、

夜の部

一番目 文祿夜話 三場

東山五條坂小松屋敷
東福寺禪房の外御
伏見城太閤秀吉の癩所

太	木	仙	中	秀	同	同	同	遊	同	手	同	同	石
村	常	權	吉	村	下	女	川	居	松	五	右	衛	門
秀	兵	陸	臣	正	仁	夜	居	居	松	右	衛	門	門
吉	陸	兵	正	臣	王	王	居	居	松	右	衛	門	門
福	壽	吉	正	臣	の	の	居	居	松	右	衛	門	門
三	三	三	正	臣	の	の	居	居	松	右	衛	門	門
郎	郎	郎	正	臣	の	の	居	居	松	右	衛	門	門
助	助	助	正	臣	の	の	居	居	松	右	衛	門	門

所作事 茶 壺 長唄囃子連中

所作事 鷺 娘 長唄囃子連中

所作事 鷺 娘 坂東三津五郎

ほうくくの態で引上げたものでした。

その後つくづく自分なんかで一座をもつやうになり、自分の劇壇でそんなことをする役者を見て、その當時のことが思ひ出されて冷汗をかいたものでした。未だに樂の日になると伊井先生のお小言を思ひ出して勉強する氣になります。

人格者伊井先生

英 太 郎

伊井先生が、發病の當時は、ちようどお名残り二筋道の中日頃でありました。大變苦しさうでありました、部屋が三階でエレベーターで昇降りがいやだと云つて一階に部屋を轉へて書生が身體をさ、えるやうにして、部屋から舞臺裏までそろそろ歩いて椅子に寄りか、り出を待てるられます。

私は阿久津の妻類子を勤めて居りましたので、出を待つて居る私に、「頼むよ頼むよ」「何しろこれだからね」「頼むよ」と云はれます、よほど苦しさうでした。さて舞臺に出られ私が出て、みかける臺詞になると、先生はウムーと臺詞が出なくなるので、私が自分の臺詞を云ひながら先生の次の臺詞を付けるのです。終つてから「私に難有うよ、難有うよ」と云はれます。そんな苦しい病氣を押ししても舞臺を勤めて居られ、そんな中でも禮を云はれる實に物がたい禮儀を重んじ

岡 鬼太郎作
所作事 獨 樂 賣 長唄囃子連中
獨樂賣子太 坂東三津五郎
同 萬造 林長三郎
同 の 娘 中村芝鶴
同 子 供 二 人

所作事 小原女と奴 長唄囃子連中
小原女お京 坂東三津五郎
奴 好 平 坂東三津五郎

所作事 賤 機 帶 長唄囃子連中
斑女の前 坂東三津五郎
渡 し 番 林長三郎

所作事 供 奴 光 内 長唄囃子連中
奴 光 内 坂東三津五郎

右の内一幕相勤め可申候

中 幕 玉 藻 前 曦 袂 一 幕
道 春 館 の 場

驚 採 金 藤 次 延
安 部 桂 女 之 助 芝 長
姉 初 花 姫 芝 太
腰 如 陸 月 月 延 芝 太
同 彌 彌 月 生 月 鶴 政 芝 延 太
同 卯 彌 小 姓 月 生 月 鶴 政 芝 延 太
同 小 姓 月 生 月 鶴 政 芝 延 太
同 女 小 姓 月 生 月 鶴 政 芝 延 太
後 室 萩 の 方 魁 成 小 和 鶴 政 芝 延 太
二 番 目 額 の 小 さ ん 三 場 車 一 雁 助 次 男 雀 郎 鶴 郎 若

る方でありました。

とうく舞臺を勤める事が出来なくなる程の重態となられ休演されました、私
が向島のお宅へ見舞に行きました、時面會謝絶であるにもか、はらず、會いたい
から通して呉れと云はれまして、私は病室に通されました、今醫者が歸つた處で
した、私は如何ですと云ふと「難有う途中から休んで済まないなア」と第一に御
自分の病氣の容態より芝居の事を云はれました。

今日は大變氣分が好いから此分なら當分は死な、いだらう」と淋しく笑はれま
した、私は「あまり會話をなさらない方がよろしい」と申上げると、「今日好い
んだよ好いんだよ」と云はれまして、私は持つて來たメロンを「召し上がれます
かしら」と申しますと「それでつないで居るんだよ、難有う」と云はれました。

私がお目にか、つて間もなく逝去されました。

私は其の時がお別れだったので。舞臺の上でも個人的にも可愛がつて頂いた
私は、役の上にも阿久津の夫人であつた事、それに二筋道の初演の當時に私に畫
いて下さつた墨畫の富士、あまりよく出来たので御自分で私の部屋に持つて來ら
れ、「こんなよく出来たのは初めてだよ、もうこれ限り富士はか、ない」とうれ
しさうに見せて下さいましたが、本當に最後の富士だつたのです。私に取つては
大切なかたみです。

思へば二筋道初演より終演まで一ケ年阿久津を勤められ、大成功に終られまし
た伊井先生のすべては大人格者であつたのです。(七年十月二十九日)

南升南
歌屋歌
のの場場

金額
の谷小
金五郎
子金之助
力田覺右衛門
心江良伊十衛門

同同同
手代柴山藤兵衛
男仙佐藤兵衛
幫金仙兵衛

自形屋新の
升屋の新兵衛
藝妓の新兵衛

同仲居小中初
南歌の女中初

大喜利
道行初音旅
一幕

佐藤四郎忠信賞は源九郎狐
花見の藤昇天

同同同
同同同
同同同

同同同
同同同
同同同

同同同
同同同
同同同

『人？鬼？』について

中村吉藏

「高利貸の家」といふのが、原の題名ですが、大衆向に「人？鬼？」と改められたわけです。幸か、不幸か自分はまだ高利貸から金を借りた経験はないが、或高利貸が不慣れた仕事に手を出して、困りぬいた揚句、自分にその後仕末をしてくれと、友人を介して懇願して来た事があります、それが演劇関係の仕事であつたから、多少の懸念は持ちながら、高利貸だつてやはり人間だ、人間扱ひしてやれば、マサカこちらを陥れるやうなマネもやるまい」と思つて、後仕末を引受けて見ると、高利貸はやはり高利貸で、大分ひどい目に逢はされ、懲々した事があります。

その體驗をそのまゝに書いたわけではなく、寧ろ逆手に出て、

高利貸の人間味を中心のテーマに、「人？鬼？」を書き上げました。
井上の高利貸熊造は、さすがに性格俳優としてのその本質的の力が自ら滲み出して来るのを感じずにはゐられませんが、デツと内にこもつた熱で見ている中に何時となく惹き附けられて了ひます、御富人も心から打込んで演出してゐるのがよく分ります。
八重子の嫁安子も上出来です。實質で、しつとりして、本然の母性が見えるが、光輝を身邊に放つてゐると思ひます。ワキ役のやうではあるが、作者の奥底の意圖からいへば、慈母観音が鬼人を解脱せしめるといふ意味合もこめてあるので、タゞのワキ役でない事は、分る人には分る筈です。
梅島の意志薄弱の現代青年も悪くない出来でした、それに子役がなか／＼よく演つてゐる事も認めてもらひたい。かく子のモダン・ガナルは、どちらかといへば單純な性格だからあの程度で善いでせう。

× × × × × × × ×

「人？ 鬼？」の 演出に就いて

水谷竹紫

中村吉藏氏の「人？ 鬼？」——原作名「高利貸の家」——は明治座の十月興行が初演でしたが私は、これの演出を、非常に強い興味を感じて引き受けた。といふのは、この作の内容がちよつと變つてゐて面白いと思つたからだ。

私は、この作に限らず、何時の場合でも、俳優の持味、云ひかへれば、俳優の個性を、その扮装する役について活かして行くといふのか、私の演出に對する大きな一つの目標なのですが、この「人？ 鬼？」を讀んだ時、これこそ、本當に、私の持論に準據して行けるものだと感じました。

そして劇中主要人物の高利貸にしろ、不良少年にしろ、その妻にしたところ、何れもこの種の類型を脱して持味に依つて、演分けて行くことにし、人？ 鬼？ の前提に對して曰く人也

の結論を、私はこの作の上に得んとした。

高利貸も人間であるといふことよりも、高利貸の人間味を出すことに留意した、この點は、主役の井上君の緻密な理解と周到な演出に、よく成功した、そして、妹婿の不良少年とその父との争ひの最中に、親子の情の知らず識らずの間に泌み出る邊りは、極めてリアルな手法をとつた。

茲にも類型的な情愛でなく、親と子兩者の人間味を基調とした親子の情愛を出すことにつとめたつもりだ。

全體としては、シリアスなそしてリアルな行き方としたが原作の花やかさに一脈の澁味を加えて見た、これは、他の狂言と彩どりの都合もあつたが……だから、極めて新しい演出といふわけには行かない。

勿論今までの新派でもいけない、といつて、營利を目的とした興行である限り、一部の観客層を目安とした新劇の手法もとれない、だから、私は、これから先當分の間のこの種劇壇は新派と新劇の中間に行くものではないかと思つてゐる、また、さうした試みが實際に於て一番に受け入れられてみる様でもある。

といふわけで私は、こうした手法に依つて、従來の新派劇の一步前進を試みたつもりである。

尙「一人？ 鬼？」は、東劇の九月興行に上演の豫定だつたものが、都合によつて十月の明治座に初演された。

従つて、原作は、九月前後の季節で書かれてある、これを此の度は、現在的时候にまで引上げて來た。そして、劇の天地も見た人の印象をより深くするためにはつきりと千葉縣下の地方色を出すことにきめた、そして、この色彩を一等よく助ける仕出しには、充分に意を注いだつもりだか……。

終りに一言お断りして、おきたいのは明治座初演の装置をそのまゝ歌舞伎座へ持つて來たことです、劇場が大きくなれば、装置も更へてゆかなくてはならない場合もありますが、然し時間の問題もありますので、ともかく今度は明治座のまゝでやることにした。

然し、初日のあくまで散漫になりはしないかと思つた事が杞憂であつたことを嬉んでゐます。

支那料理
高級酒場

日簡ビル

大市

御宴會に

大市乙女ダンス

毎夜公演

會席料理
肉のすき

長堀本店

大市

電話(三〇八〇・三三八五番)
船場(三四九〇・四一五〇番)

歌舞伎座十一月興行

東京新派總動員に藝術座加入出勤

配役

ヒルの部

鈴木泉三郎作

第一 谷

底 一幕

(數馬裝英置一)

瀬戸英一作

第二 花柳談巷 お名残二筋道

三 一場

(數馬裝英置一)

中山蝶二作

第三 大尉の娘

一 一幕

(數馬裝英置一)

岸田國士作

第四 長閑なる反目

三 一場

(岩田裝豐置雄)

ヨルの部

中村吉藏作・水谷竹紫舞臺監督

同一 人? 鬼?

二 一幕

(伊藤裝薫置朔)

瀬戸英一作

第二 花柳巷談 追善二筋道

三 一場

(數馬裝英置一)

大坂娘 川村花菱新羅並監督

第三 琵琶歌

五幕八場

(繁岡裝鑿置一)

主なる配役

喜代次 喜美代 小中 中 吳服屋 八田 五郎 村越の悴子 若松淺子 (紀三郎の情人) 阿久津の妻 熊造の妹娘 登喜 春 娘 女役 貴金屋 百婆 小島 桂野 武野 高利 豫備大 里野の兄 小島英四郎 (紀三郎の弟) 村越 徳 乙次 村越 徳 乙次 喜代次 喜美代 小中 中 吳服屋 八田 五郎 村越の悴子 若松淺子 (紀三郎の情人) 阿久津の妻 熊造の妹娘 登喜 春 娘 女役 貴金屋 百婆 小島 桂野 武野 高利 豫備大 里野の兄 小島英四郎 (紀三郎の弟) 村越 徳 乙次 村越 徳 乙次

喜多村 瀬戸 吉岡 伊東 英太 藤間 若井 雪岡 花柳 井上 山田 喜多村 瀬戸 吉岡 伊東 英太 藤間 若井 雪岡 花柳 井上 山田 喜代次 喜美代 小中 中 吳服屋 八田 五郎 村越の悴子 若松淺子 (紀三郎の情人) 阿久津の妻 熊造の妹娘 登喜 春 娘 女役 貴金屋 百婆 小島 桂野 武野 高利 豫備大 里野の兄 小島英四郎 (紀三郎の弟) 村越 徳 乙次 村越 徳 乙次

編輯後記

新築以來堂々第二陣に入った歌舞伎座は東京新派
 總動員に藝術座加入出演、新派の總帥伊井蓉峰追善
 の意味で、『お名残二筋道』と『追善二筋道』を晝
 夜に分けて上場、東西を通じ前後八回の續演に素晴
 しい人氣のこの狂言に因み、一座の人々から、故伊
 井蓉峰を偲ぶの稿と中座に東西合同大歌舞伎で上場
 中の『重井筒』に因む『近松研究會の記』は、共に
 本號の偉觀！

二十六年振りに上場の「敵討龜山嶽」については
 諸家の考證と共に、春廻家氏を煩はして、芝居見た
 まゝを得た。

一ヶ年中、毎月の様に、この月もまたこの月もと
 何時もこの欄で發行遅延をお詫びしなければなら
 ない編者は來月（十二月顔見世號）こそ初日までに
 出、一ヶ年中の發行遅れの埋め合せをするつもりで
 今からガンバつて居ます。

住田生

昭和七年十一月一日發行

月刊『道頓堀』第七十七
 號

◇ 誌代は前金でお拂ひを願
 ひます。

◇ 郵券代用は割増にて御
 注文を願ひます。

◇ 御相談の上廣告掲載の需
 めに應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

大阪市北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編
 輯部廣告係へ御申越し下さい

特價金參拾錢（郵費五厘税）

昭和七年十月三十一日印刷

昭和七年十一月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

發行所 島江 鎮也

大阪市東區區櫻橋南一丁目

印刷者 北島竹次郎

大阪市東區區櫻橋南一丁目

印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹興行株式會社大阪支店

發行所 道頓堀編輯部

電話（六六〇〇番）
 （五二六五番）

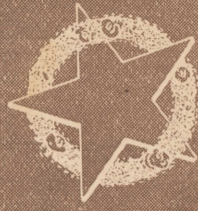
衛生口錠

功大

口より入り病を防ぐ

東京 品部堂 筒井藤安 謹啓

お顔の
あぶらを取るには
是非 !!



あぶらとりかみ
脂取紙



發賣元 大阪 朝日堂株式會社
製造元 大阪 中田スキナ屋

松竹キネマ一大特作映畫



子母澤 寛作・キング連載・犬塚 稔監督
菊五郎格子

林 長二郎とオール・スターキヤスト

山中峯太郎作・主婦之友連載・池田義信監督

聖なる乳房
栗島すみ子とオール・スターキヤスト

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和七年十一月廿一日印刷（毎月一日）
昭和七年十一月一日發行（一回發行）

「道頓堀」第七十四輯 第七年十一月號

一部 金 參 拾 錢